

福井大学平成22年度重点研究「競争的配分経費（若手研究者支援）」 言語活動の質を評価するための基礎的・実証的研究

研究代表者： 松友 一雄（教育地域科学部・准教授）

概 要	
	<p>学習指導要領の改訂により、各教科における「言語活動の充実」が求められている。福井県内外の小・中学校においても、全ての教科学習において、「話し合い」や「発表」、「調べ学習」や「文章表現」など、それぞれの教科の学習を深めるために「言語活動」が取り入れられている。しかし、学習活動として「言語活動」を取り入れるだけではなく、「言語活動」を通して「言語能力」を育成する観点から考えると、教師が「言語活動」の質を捉えるための観察眼を実践的力量として身につける必要がある。</p> <p>そこで本研究では、「言語活動」ごとに小・中学生の実際のパフォーマンスを映像として収集し、学習活動の結果などの文章表現などと関係付けながらその質を捉えるための観点とルーブリックを作成することを目的としている。さらに「言語活動」の質を学習者自身のどのようなメタ認知能力が支えているのかという点を解明するための基礎研究を進め、その結果に基づき、学習者の言語活動の質を評価するための観察眼の形成のための教員研修プログラムの作成を進めた。</p>
関連キーワード	言語活動、評価、ルーブリック、教員研修プログラム、メタ認知

研究の背景および目的

新しい学習指導要領の中で示された「言語活動の充実」に対して現在多くの小・中学校が学校全体でこの方向性に関する研究を進めている。その中で、「言語活動の質」を捉えるための指標作りとともに、教師の観察眼の育成に関する研究への需要が極めて高い。

研究代表者は、平成13年度から18年度まで6年間に渡り、基盤研究(B)「国語科教育改善のための言語コミュニケーション能力の発達に関する実験的・実践的研究」において、西日本の小学校を中心に、小学生のコミュニケーション能力の発達に関して実証的な解明を進めてきた。その中で得られた多くの学習者のデータを基盤としながら、本研究の中で新たに福井県内の小・中学校の学習者のデータを加え、メタ認知能力の発達との関係で新しく分析を進めている。その分析の中で、言語運用に関する「方法的知識」の有無が、学習者の言語活動の質を評価する際の重要な観点になり得るという結果を得ている。

また福井県内外の小・中学校との共同研究を通

して、「言語活動の充実」が各教科の学習効果を高めるためには、学習者の言語能力そのものの育成を重視する必要があることが明らかになっており、そのために教師自身が「言語活動」を支える言語能力に対する理解を深める研修が有効であることも経験的知見として得られている。

本研究は、これまでに継続的に進めてきた児童・生徒の「コミュニケーション能力」の発達に関する研究及び福井県内の小中学校との連携の中で実践的に進めてきた学習者の主体性・協同性の高い「対話型学習」に関する研究の二つの研究を基盤とし、小・中学生の「言語活動」を収集、分析し、その質を評価するための観点と発達の実態を明らかにすることを目的としている。

また、本研究の長期的な展開の中で本年は基礎データを収集し、学習者のメタ認知能力の発達を観点として分析を加え、評価の観点と発達の実態の概要を把握する点に置く。また、そこで得られた知見を生かしながら教師の観察眼を育成するための研修プログラムの作成に着手する。

研究の内容および成果

学習者の「言語活動」の実態を把握するために、活動に見られる「対話性」及び「協同性」を段階化し、五つのカテゴリーを設定した。そして、五つのカテゴリー相互の差異と相関性の高いと推定される「言語能力」との相関関係を実証的に捉えた。その結果、以下の五つの言語能力が深い関係性を有していることが分かった。

①話し合いや発表の方法など言語操作に関する

- 「方法的知識」の量的・質的状況
- ②話し合いの状況や目的、聞き手など、言語活動の場に関する認識能力と適合力
 - ③自己の認識や思考を言語化して表出するための概念的語彙の量的・質的獲得状況
 - ④学習の場における他者と協同しようとする意識に支えられた聞く力・つながる力
 - ⑤言語活動への参加を通して身につく言語活動を連続的・複合的に遂行する能力

この分析結果から、「言語活動」の質を把握するための評価方法に対応した形で二分化すると以下ようになる。

A 客観的尺度で量的に把握できる知識的側面

・・・「方法的知識」、「概念的語彙」

B 実際の学習場面に對して観察法で看取ることができるパフォーマンス的側面

・・・各「知識」の活用状況、他者との協同性、言語活動の連続性・複合性など

そこで、教師が実際に学習者の「言語活動」の質を把握するために求められる資質として考えられるのは B の能力を把握するための観察眼であることが明らかになった。さらに、実践資料から学習者に優れた言語活動を行わせるためには教師の看取りからコーチングやアドバイスなどの教育的関わりが施された場合が多いことが分かった。

以上の点を踏まえ、教員研修プログラムとして、「A 領域の内実の明示と習得方法」、「B 領域の観察を実現するための指標の開発」を進めた。特に後者は、低次から「累積的対話性」「対立的対話性」「統合的対話性」の三つの段階を明示し、実際の教員研修を通して実践レベルで検証を行い、長期的な展望に立った指導の方向性を教師に実感させる効果を得ている。

また、言語活動の評価が「量的基準」に偏る傾向が強いことを指摘し、言語活動を支える能力的要素を具体的に明確化することによって、言語活動そのものの善し悪しを背景となる言語能力との関係から捉えることを可能とし、学習者の言語活動の「質的側面」を捉えることが可能であることを実証した。

具体的には、「話す」「書く」といったこれまでの言語表現を目的や相手など社会的文脈の中で位置づけ直し、「報告する」や「説明する」といった社会的言語行為として捉え直した。

さらに説明の方法を小・中学校レベルの言語能

力及び学習内容と照合し以下の 12 点の説明の方法を明確化し、学習の構想及び学習者の言語パフォーマンスを評価するための観点として利用できるようにした。

- ①理由を明確にして説明する。
- ②例を挙げて説明する。
- ③自分の経験にもとづいて説明する。
- ④教材の記述にもとづいて説明する。
- ⑤資料を使って視覚的に説明する。
- ⑥比喩を使ってイメージ化し、説明する。
- ⑦表やグラフを用いて説明する。
- ⑧パーセンテージや数値で説明する。
- ⑨時間的な推移や空間的な相対化で説明する。
- ⑩専門用語や概念などを用い、事象を位置づけて説明する。
- ⑪仮説を立て、聞き手の類推を促して説明する。
- ⑫有力な考えや一般的な考えを引用して説明する。

さらに、それらをどのように示すことが教師の観察眼の育成につながるかという観点から教員研修プログラムの作成を行った。

本年度の研究を経て、以下の点が今後の課題として浮かび上がった。

- ① 言語能力の「状況依存的側面」と「状況創造的側面」の転移性が言語力育成のためのカリキュラムの核となる点。
- ② 言語能力の形成プロセスの中で、学習経験の蓄積によって習熟する傾向が強いという事実をどのように考えるか。
- ③ 言語活動の継続的な指導が言語活動の質を高める一方で、活動そのものに対する飽きをもたらし傾向が強い点をどのように考えるか。
- ④ 指導のための評価は可能でも評価を前提とした評価にはなじまない点をどのように考えるか。

本助成による主な発表論文等、特記事項および 競争的資金・研究助成への申請・獲得状況

「主な発表論文等」

- ・「効果的な言語活動のポイント」、「児童・生徒の意欲重視の言語活動」、「魅力ある言語活動の開発事典」、東京法令、2010.05
- ・「評価の内容と方法」、「『新たな時代を拓く中学校高等学校国語科教育研究』、学芸図書、2010.12
- ・「福井大学大学院協働実践プロジェクトにおける実践的力量形成の取り組みー理科学習における言語力育成のための語彙集作成を通してー」福井大学教育実践センター紀要、2011.2
- ・「言語活動を活性化するための発問」、「『実践国語研究』、明治図書、2011.2
- ・「言語活動の質を捉える評価方法に関する研究」、「『国語国文学 第 50 号』、福井大学言語文化学会、

2011.3

- ・「各教科における言語活動」、「『新学習指導要領本番～私の提案～』、日本教育新聞社、2011.3
- ・「言語活動の充実」他、『教育の最新事情がよくわかる本』、教育開発研究所、印刷中

「競争的資金・研究助成への申請・獲得状況」

日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究(C)一般・『小・中学生の「言語力」を育成・評価する方法の実証的・実践的研究』代表・申請中